【三谷恵子先生追悼文】

燃え尽きたスラヴ言語学の星、三谷惠子さんを悼む

沼野充義

スラヴ言語学者の三谷惠子さんが、2022 年 1 月 17 日に闘病の末、亡くなった。東京大学大学院人文社会系研究科・文学部スラヴ語スラヴ文学研究室を率いる現職の教授だった。あまりに早い逝去に言葉もない。しかし世代も近く、最後には最も身近な同僚の一人でもあった私は、思えばやはり三谷さんとは色々な縁があり、この機会に不十分ながらも書き留めておくのは言わば自分の義務であろう。私自身病魔に冒され、長期入院を続けているのだが、そのわが身に――いや、わが心に――鞭を打って自分の責任を果たしたい。

私は三谷さんの東大の大学院スラヴ語スラヴ文学専門分野の 3 年先輩である（単に年齢の問題だが）。大学院に入ると三谷さんはザグレブ大学に、私はハーバード大学にそれぞれ長期留学したので、実際に本郷で顔を合わせる機会は意外に少なかったのだが、それでも、身近な同世代の研究仲間の一人として彼女の天才的な専門能力と素晴らしい人柄に長いこと接して感銘を受け続けてきた。

大学人事の内幕を明かすのは本来ルール違反かもしれないが、関係者がすべて退職した今となっては、もはや歴史的記録として必要なものだろう。常識的に許されると思われる範囲で書き留めておきたい。確か 2012 年だっただろうか、東大のスラヴ研究室で専任教員採用の人事を起こす機会が生じた。そのポストは定年退職した長谷見一雄氏の後を埋めるべきものだったが、私は先行きが危ぶまれる（などと言うと憤慨する向きもあるかもしれないが）スラヴ研究室の再興を目指すために、優れたスラヴ言語学の専門家を招かなければいけないと考え、同僚を説得した。東大文学部のスラヴと言えば、創設者木村彰一以来文学と言語学を互いに支え合う両輪としてきたのであって（これはロマン・ヤコブソンの学風を受け継いだ伝統とも言える）、私はそのために東大に呼ぶのに相応しいのは惠子さんしかいないと判断した。そして彼女を口説いて京大から移ってもらうよう直接頼み込んだのだった。誤解のないよう（別に秘密でもないので）説明しておけば、東大文学部では当時（今でもだが）人事の公募は実質的には行っていなかったのである。その代り業績審査が厳正に行われたのは言うまでもないが。

私は大森（東京都大田区）に住んでおり、同じ大田区の蒲田に住む惠子さんとは隣

近所という感じだったので（実は彼女は京大に勤めていたときも、蒲田の自宅はそのままにして、京都と東京の間を往復していた）、ある日大森の駅前の喫茶店で待ち合わせて、東大に来てほしいと話を切り出した。そのころ彼女はすでに50代半ば、押しも押されもせぬ京大の教授である。そのような地位・年齢の大物教授の異動ということ自体かなり異例のことで、普通は後進の若手を採用して、研究室の若返りをはかるべきだったろうが、今後10年間だけでもスラヴを率いることができると思われたのは、学問的にも人格的にも彼女だけだった。ただ一つ懸念材料は、彼女の体調のことだった。三谷さんは若い頃から健康の問題を抱えていて、京大在職中もけっこう大変な時期があったとは私も聞いていた。しかし私は彼女に、ともかく東大に移ってくれれば、定年まで十年だから、その間頑張ってほしい、途中で体調が悪くなって療養しなければならない時があっても、必ず全面的にサポートするから気にせず、安心して移ってきてほしい、と熱をこめて彼女を説得したことを覚えている。

東大に移ってからの三谷さんはまさに水を得た魚のようで、授業と研究の両面で素晴らしい仕事をし、実際に東大スラヴ研究室を率いて盛り立てただけでなく、国内外の学会でも活躍し、日本ロシア文学会の会長も4年にわたって務めた。若い頃から健康の問題を抱えながら、人並みはずれた質・量の仕事をこなし国際学会に積極的に参加してきたのは本当に信じがたいことで、単に才能や知力に恵まれただけでなく、私などでは足元にも及ばない強靭な精神力を持つ人だった。

三谷さんの言語学における多大な業績について専門外の私が云々する資格はないが、彼女が書いた『スラヴ語入門』（三省堂）や『比較で読みとくスラヴ語のしくみ』（白水社）などの啓蒙書を見ると（どちらも私の座右の書だった）、ロシア語や、おそらく彼女が一番得意としたクロアチア語に限らずスラヴ語全般にわたる精確で該博な知識はもちろん（何しろ彼女には、独力で作った「ソルブ語辞典」などという先駆的な途方もない業績さえある）、言語そのものの本質を広く深く見る視点があり、結局のところ人間にとって言語とは何かを考えさせてくれるものにもなっている。これは本物の言語学者でなければできないことだろう。学者の実力は結局、誰が読むかもわからない専門論文ではなく、こういった概説書・入門書に鮮やかに現れるものだ。

三谷さんをヤコブソンの伝統に結びつける一つの側面は、彼女が文学にも深い関心を持っていた（そしてややエラそうに響くかも知れないが、趣味やセンスもよかった）ことである。セルビア・クロアチア・ボスニアの現代文学を積極的に訳し、ミロラド・パヴィッチ『帝都最後の恋』やセリモヴィッチの『修道士の死』などの貴重な訳業を残した。いずれも名訳である。昨秋出た（私は入院してしまったので未見だが）パヴィッチの『十六の夢の物語』が、彼女の生前出した最後の単行本になった（これらの翻訳はいずれも松籟社刊）。パヴィッチの幻想小説は私も大好きで、三谷さんとはよくパヴィッチの魅力について話し合ったのを懐かしく思いだす。

そういえば、三谷さんは言語学者には珍しく――などと言うと、多くの言語学者を敵にまわすことになりそうだが――日本語についても、繊細な文体意識を持っていた。私は言語学関係の評価書の類を書かざるを得なくなることが何度かあって、そのたびに三谷さんにチェックしてもらったものだが、ある時、内容だけではなく、日本語の言葉遣いについても意見されたことがあった。私は「鮮やかに」という表現が好きでよく使うのだが（この文章でも先ほど一度使った）、三谷さんはアカデミックな文章にその表現は不正確でそぐわない、というのである。言われてみれば確かにその通りで、三谷さんの書く文章が簡潔で正確であるだけでなく、そのような日本語感覚に支えられていたのだと思い当たった。

三谷さんの専門的研究は専門的過ぎて、非専門家には寄り付きようがないようにも思えるが、ある時珍しく彼女の専門的研究について詳しく話を聞く機会があり、それは中世スラヴの諸写本の間の実に細かい異同をめぐるものだったが、彼女は「普通の人にはあまり面白くないでしょうが自分はこういうことに情熱を燃やしてきた」と実に面白そうに語った。実際話はとても面白かった。きっと彼女の東大での授業もこんな風に魅力的なものだったに違いない。

少し脱線になるが、それで思い出したのがロマン・ヤコブソンの逸話である。ヤコブソンのハーバードでの授業はめっぽう面白く、スラヴ言語学などにまるで興味のないアメリカの学生たちさえも引きこんだという。どうしてそんなことができるのですか、と同僚に聞かれて、ヤコブソンはこう答えたという。「簡単なことだよ。教室に入っていくと、男子学生が隅っこで心配そうな顔をしている。車の修理代をどう工面しようかと悩んでいるんだろう。それから前のほうには、女子学生がいて、どうやら、今晩彼氏から電話がかかってくるかしらと、上の空の様子。それから、窓の外を眺めることに余念のない学生もいる。そこで私の仕事は何かと言えば、こういったすべての学生たちに、一時間の間だけ、信じさせることなんだ――10 世紀に起こった鼻母音の非鼻母音化こそ、世界で一番重要なことなんだって！」私はこの話を、ヤコブソンの高弟で、私のハーバード留学時代の恩師の一人、ホレス・ラント教授から直接聞いた。

三谷さんのことに話を戻すと、残念ながら「東大の定年まで 10 年がんばってほしい」という私の願い――いや、祈りと言ったほうがいい――はかなわず、定年まで 1 年を残して逝去されたのは痛恨の極みだった。本当にそれは燃え尽きるような最期だった。しかし惠子さんは 9 年間の東大在職中に普通の人の何倍もの仕事をし、スラヴ研究室を導く輝かしい星となった。

スラヴ語スラヴ文学のための天国があるならば、さほど遠くない将来そこで再会し、彼女とロシア語文法やパヴィッチの文学についてまた議論できることを楽しみにしている。

2022 年 2 月 21 日